
魔法少女リリカルなのは～僕は《私は》君を～

十六夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜僕は≪私は≫君を〜

【Nコード】

N2372BA

【作者名】

十六夜

【あらすじ】

少年が少女と出会ったことで全てが狂いだした・・・
狂いだした歯車はどこへ向かうのだろう
さあ、物語の序曲を始めようじゃないか

プロローグ（前書き）

はじめまして、とりあえずこの作品は作者の処女作です。なのでいろいろと変な部分があります頑張りますので温かく見守って下さい（笑）

プロローグ

「はぁ、はぁ、はぁ」

少年は走っていた。

その少年は真っ赤に染まっている。それは血だ。決して自分のではなく今まで切ってきた人間の血だ。

「居たぞ！ 追え！」

「ち、もう見つかったか。何人で探しに来てんだよ」

少年は走るのを諦め逆走し追っ手に向かって行った。追っ手は少年に銃うを乱射してきた。少年は帯刀していた刀を抜刀し迫ってくる銃弾を切り落としながら接近し相手の銃を切っていた。

「退け。命を取るつもりはない。これ以上戦闘を続けるのなら次は首を切り落とす」

少年は静かな声で言った。しかし相手は攻撃を続けており言葉は無意味だった。

「馬鹿が・・・」

少年はためらうことなく刀で次々に敵を切っていた。

最後の一人を仕留めて少年は刀を鞘に戻した。辺りは血が飛び散っており死体がたくさんあった。

「ふう……」

少年がため息をすると

「君にしては手間取っているじゃないか」

ボロボロのローブを纏ったゆらめく影のような人物が突如現れた。

「何だい。カール」

「ただ単に親友の姿を見に來ただけだよ。それとマルグリットが早く君に 会いたがっているよ。ああ、まったく妬けてしまうな」

この芝居がかった言動を他の人間は不快と感じるが少年はそこまで感じてはいなかった。底知れぬ印象があるのは間違いないだろうとしか思っていなかった。

「またいつか会いに行くよ。彼女が必要になるからね」

「マルグリットは君と一緒に居ないと不安定だ。君しか見ていない」

「俺が行くまでカールと一緒に居てくれ」

そう言って少年は歩き始めた。

「これからどこに行くんだ？」

「さあね。ぶらぶら旅をして当分休息をするよ」

「ああ、そうか。面白いことが起きるのを期待しているよ。それでは良い旅を」

カールと呼ばれた人物は消えていった。

「さて、どこへ行くかなって」

少年は暗闇の中へ姿を消した。

出会い（前書き）

短いかと思いますが頑張りました。

Dies 勢は少しずつ出てきますが本格的に活動するのはまだ先です。

出会い

海鳴市海鳴臨海公園でとある少年はベンチに座っていた。

「ここは平和だな・・・」

太陽も落ちてきてる夕方、少年は海を見ながら黄昏ていた。周囲を見回すと遊んでいた子供たちも門限があるのだろうか、帰り始めていた。そんな中、帰る気配もなく少年と同じくずっとベンチに座っている少女がいた。他の子供たちが居なくなっても少女はまだ座っていた。少年は少女がなぜだか気になり近づいて行った。

「君は帰らないのかい？」

「えっ？」

少女は突然話しかけられて驚いていた。顔を上げると自分と同じ髪の色で肩まで伸びており中性的な顔立ちの人物だった。

「皆帰ってるよ。君はどうするの？」

「家に帰っても誰もいないからいいの・・・」

「そうか」

今度は逆に少女が少年に質問した。

「あなたは帰らなくていいの？」

「僕は旅をしていてね、たまたまこの町に来たんだ。だから帰るところはないよ」

「だったら私の家に来ない？」

「出会ったばかりの人間を家に入れようとするなんて何考えてんだ」

「ねえ、いいでしょ」

「うっ」

少女は少し涙ぐんで言い少年は心を揺さぶられた。

「ふー、分かったよ。行こう」

「やった！」

少女は涙ぐんでた顔から急に満面の笑みに変わった。

「あっ名前まだ言って無かったよね？私は高町なのは。あなたは？」

「僕は・・・・・・・・ナギサ・・・・・・・・ナギサ・ライヒハートだよ」

「よろしくね！ナギサくん！」

「ああ、よろしく。なのは」

なのははナギサの手を取って歩きだした。

これが二人の出会いだった。

出会い（後書き）

次回、黄昏がでるかも？

てか黄昏が病んじやっていいのかな？

キャラ設定（前書き）

物語の進行によって詳細が追加されていきます。

キャラ設定

名前…ナギサ・ライヒハート

年齢…9歳「1期開始時」

性別…男

一人称…僕、感情的になったり黒円卓メンバーなどに対しては俺

髪型…神咒神威神楽の天魔・夜刀の髪型、時々髪を結ぶ「ベアトリ
スみたいな感じ」

髪の色…オレンジに近い茶髪かな　まあなのはさんの髪の色と同じです。

瞳の色…赤

顔…中性的、ぶっちゃけ練炭です

術式…永劫破壊「エイヴィヒカイト」、ミッドチルダ式

聖遺物…罪姫・正義の柱

武装形態…人器融合型

位階…？

魔力光…水色

デバイス…？

魔導師ランク…？

使用武器…なんでも可、特に刀剣類は得意、体術もできる

特技…料理、裁縫、洗濯、掃除など主婦スキルを持つ

黒田卓メンバーとは基本誰とでも話せる。ラインハルト、メルクリウスとも普通に話せる珍しい人物。

皆に忘れがちな「形成（笑）さん」の存在も忘れないが時々忘れる。中性的な顔立ちのため女性に間違われることがあり本人はそれを気にしている。

争いや面倒ごとは苦手であり避けようと努力をするものの何故か関与してしまうことが多い。

高町家一家にお世話になるが女性陣には勝てなく女性の服を着させられたりされ、立ち向かうも精神的ダメージを負って帰ってくる。マリィの愛が重すぎて悩みの一つである。

基本戦闘は刀剣類か聖遺物。デバイスはあまり使用しない。

キャラ設定（後書き）

こんなもんですかね〜

黄昏の歌（前書き）

なんかもうマリイじゃなくなね・・・

黄昏の歌

「血、血、血、血が欲しい。

ギロチンに注ごう、飲み物を。ギロチンの渴きを癒すため。

欲しいのは、血、血、血」

黄昏の浜辺で少女が歌っていた。断頭台で歌われる血のリフレインを。

それは真っ白な布一枚をドレスのように纏った金髪の美しい少女だった。

「血、血、血、血が欲しい」

彼女の白く美しい肌には似合わないものがあつた。首にあつた赤い斬首痕、ギロチンの痕が。

「欲しいのは、血、血、血」

「血が欲しい」

誰も知らない讃美歌を歌い続けていた。

「ナギサ・・・」

ナギサのために歌ってるんだよ

なのに・・・わからないよ」

少女は歌うのをやめ、ぽつりとつぶやいた。緑の瞳から光が消えていく。

「なんであの女の子が気になったの？」

なんで話しかけたの？

なんであの女の子について行くの？知らない子でしょ？

なんで手をつなぐの？私がいつでも手をつないであげるよ

なんであの子の家に行くの？ここに来てよ

なんで？ネエ、ナンデナノ？

ナンデ？ナンデアノオンナノコトイッショナノ？

ワタシトイッショニイタハウガタノシイヨ」

少女の発する言葉だけがこの黄昏の浜辺を支配していた。

「私とずっと一緒に居てくれるって言ったのに・・・

綺麗だよって言ってくれた。愛してるって言ってくれた。

ねえどうして？なんでなの？あの女の子がいけないのかな？

あの女の子の血を注げばいいのかな？」

しかし言葉は思い人には届かない。

「ねえナギサ、愛してるよ、他の誰よりも、ずっと、永遠に。」

愛してるよ。

[illegible]

ワタシハアナタヲコンナニモアイシテルヨ、エイエンニ」

黄昏は今日も歌い続ける。愛してる人のために。

黄昏の歌（後書き）

ヤンデレの勉強してきます！

黄昏の思いを受けた人物は・・・(前書き)

今日は成人式ですね！

成人された方おめでとうございます！

作者はまだ成人してないです・・・

黄昏の思いを受けた人物は・・・

「うあっ！・・・・はあ」

ナギサは布団から突然起きた。

「またマリィか。あんな夢の中で見させられたら安心して寝れないって。」

てかあれホラーじゃないのか・・・・いつか殺されそう・・・・」

「んっんっすっすっZZZZ」

ナギサの隣には少女が寝ていた。高町なのはである。なぜかというところは彼女の家である高町家だ。

そして彼女の部屋、そしてベットで一緒に寝ていたからである。

彼女に連れられて一緒に生活して一週間、だいぶこの生活には慣れてきた。彼女の家族の話もそれなりには聞いて父親である高町士郎が事故で入院しているなどの事情は分かった。高町士郎と病院で会った時はお互いを警戒しあった。なんせ血の匂いがお互いの体に染みついていたからだ。

「ナギサ君・・・と言ったね」

「はい、そうですよ」

「君は人を殺したことがあるね？それも一人、二人のレベルじゃないもっと多くの人を・・・」

「ええ、でも安心して下さい。危害は加えませんし、何かあったら御家族は僕が守りますよ」

「信じてもいいんだね？」

「危害加える気ならもうとっくにやってますよ。」

それよりあなたは裏の世界から足を洗った方がいいんじゃないんですか？

ずいぶんと体のダメージが大きいですか？」

「もう止めるつもりだよ。家族にも迷惑をかけたしね。なのはが信用してるんだから君は大丈夫だね。」

ではナギサ君、家族を頼むよ」

ナギサは病院での会話を思い出していた。

「この会話は絶対病院でする話じゃないよな・・・」

なのはの足が布団から出ていたので足を入れナギサも布団の中に入った。

「当分ここで生活するか。何も起きなければいいんだけどな。一応みんなにでもいつか会おう。」

マリイにも会いに行かないといけない。彼女は純粹でいい娘なんだけどね。

でも夢で出てきた状態だと会うとまずいことになりそう」

とぶつぶつ言うのだった。

「ナギサ君、どうしたの？」

「いや、なんでもないよ」

なのはが起きてしまった。少し長く思い返していたのか。

隣のなのはに優しい笑みで見つめながら

「おやすみ、なのは」

「うん、おやすみ」

お互いそっとつぶやいた。

場所???

時刻???

「??? おお おオオオオオ、ナギサは日本に来てんじゃねえエエのかよ!？」

「ええ、来ているはずですが・・・てか声大きいのもう少し音量下げてください」

「彼には少し休息が必要だ。休ませてあげるべきだ」

「ああん？ いい加減奴とは一度殺りあいてえんだよ！」

「まあまあ、いつかは会えるんですから勘弁してやって下さい」

女性は男性を抑えるよう言葉を発した。

「僕はもう行くよ」

叫ぶ男性とは別の男性が歩きだした。

??? 「どこに行くんだボウズウウ？」

??? 「妹を迎えに行くんだ」

??? 「あ、待って下さい！私も行きます！」

女性 は 男性 について 行った。

??? 「ああアアア！クソがつ！」

三人の声 が それぞれ 足音 になって 消えて いった。

黄昏の思いを受けた人物は・・・（後書き）

???の人物三人分かる方は分かります。

まあいつかまた出てくるので。

序曲の始まり（前書き）

ちよつと作者は疲れているので勘弁して下さい
＜ m （ m ＜

序曲の始まり

カサカサカサカサ・・・

暗い森の中でうごめく影があった。形からして人間では無いだろう。ましてこの世界に存在するかは怪しい物体が駆け巡っていた。

怪しい物体は同じその場に居るとある人物に向かって進んでいるようだった。

「ハアハアッ！」

その人物は息が上がっている。

体中、傷だらけで腕からは血が流れていた

その人物は小さな赤いビー玉のような物を取り出して自分の前にかざし、翡翠色の魔法陣を展開した。

「くっ！」

怪しい物体は猛スピードで迫ってくる。

「ジュエルシールド封印！」

翡翠色の魔法陣と怪しい物体がぶつかり合った。

怪しい物体は跳ね返った。一緒に周辺に黒い破片みたいなものが落ちて来た。

たぶん怪しい物体の物だろう。

怪しい物体は這いずりながら森の暗闇の中に逃げる様に帰って行った。

「逃がしちゃった。追いかけて……なく……ちゃ……」

魔法陣を展開していた人物はそう言い倒れていった。

『どうか、僕の声を聞いて。力を貸して。魔法の力を……』

その人物は光に包まれていった。

光が消えるとそこにはフェレットに似た動物と赤い光輝く玉があった。

ある少年は窓から光の方角を見ていた。

「なんだこの感じは・・・」

不思議な感じを受け、ナギサは顔を渋らせた。

戦闘を行ったことは分かった。そして魔力を感じたので魔法が関わってるのだろうと考えた。

「なんでこんな所で魔法が？俺を狙った戦闘ではないようだが・・・

」

自分を狙ってるわけではないので少し安心をした。そこまで脅威を感じるレベルでもない。

しかしこれは何かがおこるのではないかと思った。そこまで干渉しようとは思わないけど。

「なあカール、これもお前の劇場での出来事の一つなのか・・・」

友である水星へ言葉を発した。

「まあお前の思い通りには俺は動かないよ」

そう言い彼は窓にカーテンをして窓から離れて行った。



「んんんっ」

ベットから携帯の音楽が鳴っている。ベットの人物は携帯を取ろうと手を動かしていた。

しかし携帯はベットから落ちて床に落ちた。

ベットの人物はやっと携帯を取り音楽を止めた。

「ん〜ん〜なんか変な夢見ちゃった。あれ、ナギサ君はもう起きてるのかな？」

声を発した人物はもう一回背伸びをした。

高町なのはの起床だった。

「ナギサ君起こしてくれてもよかったのに〜」

文句を言いながらなのはは部屋を後にした。

場所..???

時刻..???

???
「これは・・・」

???
「魔法・・・ですか？」

???
「ええ、そのようね。まっ私より格下のようだけど」

???
「ケッ、いけすかねえな」

???
「私たちには危害が無い様ですが」

???
「別に戦闘だけだから大丈夫よ」

???
「あなたがそう仰るなら大丈夫でしょう。しかし・・・」

そう言いその人物の優しそうな雰囲気が一変し冷酷な感じを出した。

「後には私たちの障害となるなら排除しなければなりません」

「そんなときや、俺が行くぜ。この国は退屈だア」

「これも副首領閣下の茶番なのでしょうかね」

「あゝまったく、やんなっちゃう」

「ともあれは当分様子見です。二人ともいいですね？」

そうして三人の会話は終了した。

序曲の始まり（後書き）

作者「魔砲処女ドジッ子ザミエルをなのはと戦闘させたいな」

??? 「ほう、貴様後で闘技場に来い」

作者「!!!!」

朝の日常と保護（前書き）

駄文かと思いますが頑張ったのでよろしくお願いします！

朝の日常と保護

「おはよう」

なのはリビングに降りてきてあいさつをした。

「あっなのは、おはよう」

朝食の準備をしているなのはの母である高町桃子がなのはにあいさつをした。

「おはよう、なのは」

桃子のあいさつに続いて父である高町士郎があいさつを返した。

「ナギサ君とお兄ちゃんとお姉ちゃんは？」

家族である人物たちがこの場に居ないので士郎になのは尋ねた。

「さっきナギサ君は縁側に居たよ。恭也と美由希は道場に居るんじゃないか？」

場所を聞いたなのはナギサと兄と姉である恭也と美由希を探しに行った。

縁側に来たなのは柱に肩を預けて座っているナギサを見つけた。

「おはようナギサ君！」

なのはの声に気づいたナギサは顔を振り向かせた。

「おはよう、なのは。今日も元気だね」

「うん！元氣だよ」

「なんか僕に用？」

「朝ご飯できたからリビングに来てね」

「うん、分かったよ」

「それと何で朝起こしてくれなかったの？一緒に寝てるのに・・・」

「いや、あまりに気持ちよさそうに寝ていたからね」

「ふん」

なのははまだ少し根に持っているようだった。

「それより恭也さんと美由希さんはもう呼んだの？」

「あっいけない、呼びに行かなきゃ」

なのははそう言い道場へ向かって行った。

高町家の人は仲が良い。

朝食を食べ始めると士郎が料理の感想を言い桃子がそれを聞いて感激する。

一見それは夫婦の何気ない行動だと思う。

しかしそれを行うまでの動作が新婚生活レベルのいちゃつきだ。

別の方を見てみると恭也が美由希の制服のリボンを正している。

普通はそこまで兄は妹にしないだろう。

残った末っ子であるのははナギサと仲良くする。

「はい、あーん」

「いや、いいよ。自分で食べれるし・・・」

「えっ」

これが高町家の大体の朝の風景である。

朝食が終わりなのはは学校に行こうとしていた。

「もう学校に行く時間なんだね」

「ナギサ君も一緒に学校に行こうよ！」

「僕はいいよ。士郎さんや桃子さんに迷惑をかけるわけにはいかな
い」

ナギサは学校には行っていない。

学費などは自分の金で払うことはできる。

高町夫妻も行ってみないかと聞いてくる。

しかし実際本心はメンドイの一言である。

学力だって十分であり他の国の言語も複数使える。

今更行く気にはなれないのだ。

「まあ考えとくよ。それよりバスに間に合わなくなるよ」

「うん、行ってきまうす！」

「行ってらっしゃい」

なのはの行く姿をナギサは見送った。

「さてと」

ナギサは家の中へ戻った。

「翠屋の手伝いをしないと」

居候させてもらってる身なので何もしないわけにはいかない。

そこでナギサは高町家が経営している喫茶『翠屋』の手伝いをする。

「それにしても昨日のが気になるな」

ナギサがこの町に来た時には不審なものは何も無かった。

「今度でも暇な時に魔力が在った場所に行ってみるか」

夕方の公園を三人の少女が他愛もない話をしている。

一人はなのほでありもう二人は友人のアリサ・バニングスと月村すずかである。

「こっち、こっち。ここを通ると塾への近道なんだよ」

金髪で活発そうな少女のアリサが指をさして言った。

「あ、ここは昨日夢で見た場所？」

なのはは夢の出来事を思い出した。

「なのはちゃん？」

すずかがなのはを呼んだ。

「なんでもないよ」

なのはは足を動かし始めた。

「助けて」

なのははまた足を止め、今度は声が聞こえた。

「助けて」

もう一度聞こえてきた。

「なのは？」

「なのはちゃん？」

なのはは声が聞こえてきた方向へ走って行った。

すると倒れている動物が居た。

意識があるようで首を動かしている。

なのはがその動物を抱えた。

「この子怪我してる。どうしよう」

「とりあえず病院に連れて行きましょう」

「こういう時は獣医さんだよ」

「この近くに獣医さんは在ったっけ？」

「ええっと」

なのは達がそうこうしている内に動物は意識を失っていった。

朝の日常と保護（後書き）

いつかシュピーネさん無双できるかな・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2372ba/>

魔法少女リリカルなのは～僕は《私は》君を～

2012年1月13日01時53分発行